

J. S. ミルの自然観と定常状態の経済思想

鈴木 安次*

要 約

J. S. ミルは、人類の相続財産である自然の美が精神的・文化的価値を有し、人間の進歩に不可欠なものとの自然観の下に、物的成長による経済的進歩が停止した定常状態の積極的な意義を肯定的に評価し、自然の美が失われる前に定常状態に入ることを政策的に選択すべきことを提唱した。地球環境問題が深刻化する今日、ミルの定常状態の経済思想は、自然生態系の生物的・物理的制約に基づく成長の限界として捉えなおされ、持続可能な発展のための経済学として再構築された。しかし、自然景観の美が人間にもたらす精神的・文化的価値の側面については、自然保護の思想として部分的に継承されてきたが、定常状態の経済思想の再構築の動きの中で一体的な継承は未だなされていない。環境面から持続可能な経済社会の実現に向けて、ミルの自然観と定常状態の経済思想の再評価が求められるが、その際、自然生態系の科学的評価に加えて、自然景観の美が人間にもたらす精神的・文化的価値を評価し、経済的進歩よりも人間の進歩を求めたミルの思想に立ち返ることが必要である。

キーワード：J. S. ミル、自然景観、定常状態、持続可能な発展

はじめに

今日、環境問題は地球規模で深刻化しているが、これは経済学的には、産業革命以降の工業化による経済成長が自然の受容能力を量的にも質的にも超えてきたことに起因するものと捉えられ、その背景としてこのような経済成長を支えてきた経済学の理論と政策がある。したがって、環境問題の解決のためには、経済成長を前提とする経済社会システムを見直すとともに、従来の効率を規範とする経済成長優先の経済学を見直す必要があり、新たなパラダイムへの転換が求められる。

このような観点から経済学史をさかのぼる時、J. S. ミル（ジョン・スチュアート・ミル、1806–1873）の経済思想が注目される。ミルは、19世紀中頃のイギリスの代表的な経済学者であり、哲

学者、思想家である。ミルは、アダム・スミスの個人主義的・自由主義的経済学を継承しつつ、産業革命の進行に伴う社会問題に対応して、社会改良と自由の実現を追求し、多岐にわたる著作を著すとともに、政治的・実践的活動にも身を投じた。その主著「経済学原理」（1848年）は、ミルがスミスの「国富論」をモデルに、経済学を最良の社会思想に照らして説明しようとしたものである。その中で、今日の環境問題にも通じる示唆に富む洞察が示されているのが、「定常状態（stationary state）」⁽¹⁾の議論である。

定常状態は、物的成長による経済的進歩は停止した状態である。ミルは、自然景観の美が天賦のものであり、また人間の幸福にとってかけがえないものであることを認識し、物的な成長のない定常状態の積極的な意義を肯定的に評価した。そして、自然景観の美が失われる前に、定常状態に入ることを政策的に選択すべきことを提唱した。

定常状態の経済思想は、その後100年以上にわたって顧みられることがなかったが、地球環境問

2008年11月28日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科非常勤講師 環境法、環境経済

題の顕在化や持続可能な発展のあり方との関連でミルの定常状態の経済思想を継承した新たな経済学が提唱されている。本稿では、ミルの自然観と定常状態の経済思想を環境問題の文脈から捉え直すとともに、その現代における継承について考察し、特に自然景観の保全の見地からミルの定常状態の経済思想の現代的な意義を再評価することとしたい。

1 ミルの自然観

(1) 自然景観の価値

古典派経済学においては、自然は、土地として耕作の対象となり、労働とあいまって生産物を生み出す生産要素であった。自然は、荒れた森であって肥沃な平原に転化されるべきものであり、原生のありのままの自然を美と捉える意識はなかった。「アダム・スミス以来、人間によって開墾され飼育慣らされた自然に経済学者は美と価値を見いだし」⁽²⁾ てきた。

これに対して、ミルは、田園の風物や自然の景色を愛し、また植物への興味から植物学者や後に昆虫学者として有名になるファーブルらとも交流のある、ナチュラリストであった。ミルは自伝において、「山は若い頃のピレネー行きのおかげで私にとっては自然美の理想だった」⁽³⁾ といい、「私の生涯のよろこびの多くはそういう自然への愛着のおかげだった」⁽⁴⁾ という。

ミルにとって、自然の美は、人間の精神的な発達や人間の進歩にかかわる、かけがえのない価値を有するものであった。ミルには、精神的危機といわれる、憂鬱で重苦しい失意の時期があった。それは、父による英才教育の結果、「長い間の知的修練が、早期に何でもかんでも分析してしまうことを私の抜きがたい習慣にしまし」⁽⁵⁾ い、一方で、「分析の持つすべてを解きほぐす力に抵抗できるだけの強さのある感情を、私の受けた教育は育ててくれなかった」⁽⁶⁾ ため、人生の目的を見失ったのである。この危機を救ったのが、自然への愛着であり、その契機となったのが自然の美を讃えるワーズワースの詩であった。

「ワーズワースの詩をわたしの精神状態への良薬たらしめた根本は、それらが単なる外形の美だけでなく、その美に感激しての感情の状態、その感情に色どられる思想の状態などを表現している点であった。これこそ私の求める感情の教養そのものであると私には思えた」⁽⁷⁾ という。そして、「個人の幸福の構成要素として感情が何にもまさって重要であることはいわば公理であり、改めて述べる必要のない自明の理となっている」⁽⁸⁾ と述べるに至る。

自然の美がもたらす感動ややすらぎが人を幸福にする、それは労働の生産物である富の増大を目的とするミルの経済学の範囲を超えるものである。労働の生産物たる富を増やし、貨幣を増やし、経済的進歩を図っても、それだけでは人は幸福にはなれないのである。これについて、ミルは、経済的進歩は生存や生活の向上という目的に限定し、経済的進歩の先に人間の進歩があると考えた。美の享受など精神的・文化的な価値によって人間の進歩が図られ、人間の幸福がもたらされる。そのためには自然の美の保全が必要であると考えた。

(2) 人類の相続財産

ミルは、「土地は、本来、人類の相続財産である。その土地を人に私有させるのは、まったく人類全般の便宜に出でることである。土地の私有がもしも便宜を与えないならば、その私有は不正である」⁽⁹⁾ という。ここから、農業生産のための土地改良家でなければ土地所有が正当化されない、あるいは、耕作のための土地の独占権は他人が通行のために土地に立ち入ることを禁止するものではないといった考えが導かれる。

土地すなわち自然はいうまでもなく天賦のものであり、人類の相続財産として共同で守り、管理される必要がある。そのためには、「共同の受益に関する諸規定が存在しなければならない」⁽¹⁰⁾。今日のことばでいえば、ミルは、自然を公共財ととらえ、土地所有の規制や行為規制などにより公的に管理することを主張していたのである。

この点に関するミルの実践的な考えが示されているのが、土地保有改革協会の綱領である。彼は

晩年になって、彼の理論の実践に取り組む中で、土地保有改革協会を結成し、自然の美の保全について、土地保有にかかる問題として取り上げている。土地保有改革協会は 1871 年に設立されたが、その 10 か条の綱領の中で、自然の美の保全に関連する第 9 条と第 10 条にミルの自然観が反映されている。まず第 9 条を見てみよう。

「九、現在の荒蕪地の大きな部分を、前諸条に規定された目的と原理にもとづいて耕作せしめることは、当を得たことであるが、肥沃度の劣っている土地、とくに人口稠密な地区に近接した土地は、社会一般の享楽のために、また健全な田園趣味や、より高級な快楽をすべての階級の人々に奨励するために、またさらに終極的には使用の決定を将来の世に残しておくために、野生の自然美の状態にとどめておくことが望ましいこと」⁽¹¹⁾。

これは、耕作という人間の生存上の必要からする土地利用を認めつつ、他方で、自然景観が人にもたらす精神的・文化的価値を重視し、「野生の自然美の状態にとどめておくこと」を求めるものである。また「人口稠密な地区に近接した土地」とは、都市部における住環境が悪化する中で都市住民にとっての自然の重要性を指摘するものである。更に、「終極的には使用の決定を将来の世に残しておく」という立場は、今日の持続可能な発展の概念を先取りする考え方である。

続けて第 10 条で、自然の美の保存のための具体的な方法が提起される。

「十、歴史的、科学的ないし芸術的価値のあるすべての自然物または土地に付帯した建造物は、必要とする限りの周囲の土地とともに、（保存の目的で）所有する権限を国家に獲得すること。ただその場合に、取得された土地の価値は、所有者にたいして補償がなされる」⁽¹²⁾。

ここでは、野生の自然の美だけではなく、歴史的、科学的ないし芸術的価値として、価値を捉え

る視点が広がり、自然物のみならず土地に付帯した建造物まで対象とされている。また、その保存の手法として、国家による所有権の確保を求めている。

2 ミルの定常状態

(1) 停止状態と定常状態

自然の美の価値を認め、人類の相続財産として保全すべきとするミルの自然観は、その定常状態の思想に反映されている。ミルは経済学原理の「第四編 生産および分配に及ぼす社会の進歩の影響」の「第六章 停止状態について」において、「一体、社会は、その産業的進歩によって、どのような究極点へ向かっているか。この進歩が停止した場合、それは人類をどのような状態に置くと、私たちは予期すべきであるか」⁽¹³⁾と問いかけ、自らの見解を示している。本章は、翻訳の文庫版で 10 ページほどの短い記述であるが、ミルの自然観の反映と現代に通じる深い洞察を読み取ることができる。

ここで、まず停止状態と定常状態の違いを見ておこう。停止状態とは、古典派経済学が直面していた課題である。すなわち、資本の増大、人口の増加及び生産的技術の進歩は富の増加をもたらすが、それは無制限ではなく、経済的な進歩の終点には停止状態が存在するという考え方である。ここでは耕作のための土地がなくなっていく、また、その収穫も逡減していくため、国民の大多数の生活状態は悲惨なものとなる。そしてこのような停止状態を究極的には避けることができないと考えられていた。スミスをはじめ古典派経済学の多くの経済学者は、経済的な進歩状態にあることが望ましいと考え、停止状態の到来をいかに延期するかに腐心していた。そのような中で、マルサスは人口の抑制を主張し、論争となっていた。

これに対して、ミルは、「人口の増加が資本の増加を追い越すのを防ぎ、社会の最下層にある諸階級の生活状態が悪化するのを防ぐためには、人口に対する細心の、あるいは思慮に出ずる抑制が不可欠である」⁽¹⁴⁾として、「富および人口の停止

状態は、それ自身としては忌むべきものではない」⁽¹⁵⁾と主張した。人口を抑制し、富を公平に再分配すれば、最下層の人々の生活状態も悪化を防げるというのである。

そして、経済の進歩状態よりも停止状態のほうが望ましいとする。すなわち、経済の進歩状態については、「自らの地位を改善しようと苦闘している状態こそ人間の正常の状態である……と考える人々がいただいている、あの人生の理想には、正直に言って私は魅力を感じない」⁽¹⁶⁾という。これに対して、自らの理想として、「最善の状態はどのようなものかといえば、それは、だれも貧しいものはおらず、そのため何びともっと富裕になりたいと思わず、また、他の人たちの抜け駆けしようとする努力によって押し返されることを恐れる理由もない状態である」⁽¹⁷⁾といい、そこでは、「人生の美点美質を自由に探求」⁽¹⁸⁾できる人が多くなる。これは今日の社会状態よりもはるかにすぐれた社会状態だという。

古典派経済学者が、富の増加が停止した悲惨な状態を停止状態としてその到来を恐れたのに対して、ミルは、富の増加が停止した状態でも人口抑制と富の再分配により悲惨な状態にはならず、人間的進歩が図られる、はるかにすぐれた社会状態であると考えた。ミルは“stationary state”という古典派経済学者のいう停止状態と同じ用語を用いているが、ミルが人間的進歩が図られるすぐれた社会状態と考えた“stationary state”については、本稿では「定常状態」と表現している⁽¹⁹⁾。

(2) 自然景観の保全と定常状態の選択

ミルは、当時の経済状況が、協業などの利益を最大限に獲得できる人口密度に達している、すなわち停止状態に近づいていると考えた。貧困の克服と生活の向上を求めて、農地の拡大のため共有地の開墾が進み、自然の喪失が進行していく状況にあった。そして、このような状況を踏まえて、自然の美観のかけがえのない価値を次のように述べる。

「孤独——時おりひとりでいるという意味に

おける——は、思索または人格を深めるためには絶対に必要なことであり、自然の美観壯観のまえにおける独居は、思想と気持ちの高揚と……を育てる揺籃である」⁽²⁰⁾。

ここで、「自然の美観壯観」を思索や人格を深めるためのものとして特記していることが注目される。これは、自伝で述べているところと共通するもので、自然の美が、人間の精神的な発達や人間的進歩にかかわる、かけがえのない価値を有することを表現するものである。そして、自然の美が失われてはいけないことを、次のように述べる。

「自然の自発的活動のためにまったく余地が残されていない世界を想像することは、決して大きな満足を感じさせるものではない。人間のための食糧を栽培しうる土地は一段歩も捨てずに耕作されており、花の咲く未墾地や天然の牧場はすべてすき起こされ、人間が使用するために飼われている鳥や獣以外のそれは人間と食物を争う敵として根絶され、生垣や余分の樹木はすべて引き抜かれ、野生の灌木や野の花が農業改良の名において雑草として根絶されることなしに育ちうる土地がほとんど残されていない——このような世界を想像することは、決して大きな満足を与えるものではない」⁽²¹⁾。

その上で、進んで定常状態に入ることを選択すべきとして、次のように述べる。

「もしも地球に対してその楽しさの大部分のものを与えているもろもろの事物を、富と人口との無制限なる増加が地球からことごとく取り除いてしまい、そのために地球がその楽しさの大部分のものを失ってしまわなければならぬとすれば、しかもその目的がただ単に地球をしてより大なる人口——しかし決してよりすぐれた、あるいはより幸福な人口ではない——を養うことを得しめることだけであるとすれば、私は後世の人たちのために切望する、彼らが必要に強いられて停止状態にはいるはるかまえに、自

ら好んで停止状態（定常状態）にはいることを」⁽²²⁾。

ここで注目されるのは、定常状態を自ら選択すべき理由として、自然の美が失われ、地球の持つ楽しさを失ってしまうことをあげていることである。富の増加は必ずしも人の幸福につながらない。物的な成長、経済成長は必ずしも人の幸福にはつながらない。人の幸福のためには、地球の持つ楽しさ、自然の美がもたらす精神的・文化的価値の享受が不可欠であり、それが人間的進歩をもたらす。そして、そのために自然の美を保存することは次世代に対する責務でもある。ミルの定常状態は、ミルの自然観に根ざすものであり、積極的に選択すべきもののなのである。

また、ミルは、定常状態においては、人間的進歩が図られるのみならず、人間的進歩によって経済の質が変わることを示唆している。すなわち、「停止状態においても、あらゆる種類の精神的文化や道徳的社会的進歩のための余地があることは従来と変わることがなく、また、『人間的技術』を改善する余地も従来と変わることがないであろう。そして技術が改善される可能性は、人間の心が立身栄達の術のために奪われることをやめるために、はるかに大きくなるであろう」⁽²³⁾という。技術の改善が経済的進歩の見地ではなく、人間的進歩の見地から進められるという考え方は、経済活動の質を問うものであり、物的・量的な拡大ではない質的な発展を志向するものである。また、ミルの自然観に即していえば、技術の改善が自然の保護や自然との調和の見地から進められるとの意味合いも含むものと考えられる。

3 定常状態と持続可能な発展

(1) 環境問題の深刻化

ミルは、当時の英国が停止状態に入りつつあると考えたが、産業革命以降の技術革新と自由貿易によるフロンティアの拡大は、土地の収獲通減の法則を克服し、世界恐慌や世界大戦等を経つつも、その後長期にわたって経済の飛躍的な成長をもた

らした。またこの間に経済学は効率と成長を追求する理論として精緻化されていく。他方で、ミルの定常状態の経済思想は100年以上にわたって顧みられることがなかった。

しかし、経済の飛躍的な成長は、地球規模で環境問題を深刻化させた。これには二つの側面がある。第1に、環境が有する経済資源としての機能の損耗である。再生不可能な資源の枯渇のみならず、再生可能な資源についても過剰利用による不可逆的な損耗が生じている。第2に、環境が汚染物や廃棄物を受容し、浄化する機能の損耗である。この機能の限界を超える現象が環境汚染や自然破壊として拡大している。古典派が生産要素と捉えた「土地」を今日的な意味で「自然」と置き換えるとき、現代における環境問題の深刻化は、古典派が将来に繰り延べようとした停止状態の到来を告げるものともいえる。

すなわち、古典派経済学が恐れた停止状態は、今日的には、環境が有する経済資源としての機能や汚染物・廃棄物を浄化・受容する機能に限界があり、経済成長に対して環境が制約条件となることを意味すると考えることができる。宇宙船地球号の比喩はこのような認識を象徴している。「地球は……一つの宇宙船になっていて、それゆえ、人間は、物質形態の連続的な再生産能力を持つ循環的な静態システムのなかに、自分の場所を見出さなければならない」⁽²⁴⁾のである。

(2) 定常状態と環境制約

環境問題の観点から、ミルの定常状態の経済思想を再評価し、蘇らせたのは、ハーマン E. デイリーである。デイリーは、1973年に出版された「定常状態の経済：生物物理学の均衡と道徳的成長の政治経済学に向けて」において、GNPの極大化を目指す経済を批判し、人類と環境のために新たなパラダイムが要請されるとして、ミルの定常状態を取り上げた。その意図するところは経済学と生態学の統合であり、その後一貫して定常状態の経済と持続可能な発展のあり方を論じている。

デイリーによれば、自然界は、有限で成長することなく物質的には閉じた生態系であり、人間

の経済活動は生態学的に持続可能な水準にとどめておかなければならない。経済成長に対するこのような制約は、環境の自然生態系としての生物的・物理的な限界によるものである。ミルは人口と物理的な資本ストックの増加がゼロであるのに、技術と倫理は継続的に改善していくような状態を示したが、持続可能な発展が求められる今日においては、「人口の増加と生産の増加によって、環境の持続可能な資源再生産力、廃棄物吸収力をわれわれは超えるべきではない。したがって、いったんその点に到達すると、生産と再生産は取り換えのためだけに行われるべきだ。質的な改善は継続しながらも、物理的な成長は停止しなければならない」⁽²⁵⁾ のである。したがって、「量的拡大（成長）という経済規範を、質的改善（発展）という経済規範に置き換える」⁽²⁶⁾ ことが必要となってくる。

そこでは、マクロ経済は「成長することのない生態系の下位システムであり、その結果、マクロ経済にも最適規模がある……この最適規模の必要条件は、経済のスループットが生態系の再生力と吸収力の範囲内に収まっていることだ」⁽²⁷⁾ という。ここで、スループットとは原料の投入から廃棄物の産出までのフローを指す。そして、かつては自然の制約が少なく人工資本の増加によって成長を図ることができたが、自然生態系の再生力・吸収力を自然資本と捉えると、人工資本の増大によって今日では自然資本が相対的に希少になっており、「自然資本の維持を優先させることが必要」⁽²⁸⁾ と指摘する。

(3) 持続可能な発展

このように、ミルの定常状態の経済思想のうち、物的な経済成長の停止という観点については、自然生態系の制約による経済成長の限界として、現代的な文脈で、より自然科学的な根拠をもって復活したといえる。しかし、ミルの定常状態には、「誰も、貧しいものはおらず」という理念が含まれており、この観点も含めて提起されたのが持続可能な発展の概念といえる。

「持続可能な発展」は、WCEDによって「将来

の世代が自らの欲求を充足する能力を損なうことなく、今日の世代の欲求を満たすこと」⁽²⁹⁾ と定義され、1994年のリオ宣言によって世界のコンセンサスとなった。WCEDのこの定義にはあいまいな部分も残されているが、持続可能とは、自然生態系の保全を制約条件とする環境面からの持続可能性が必要であり、かつ、公平な所得分配が今日の世代の内部及び今日の世代と将来の世代の間の二重の意味で確保されることが必要である。

デイリーの定常状態は、自然生態系の制約が主眼ではあるが、倫理社会的な限界として、成長が将来世代に課される費用によって制限されることを指摘しており、自然資本の維持を通じて、将来世代との公平を期するものである。また、資源利用の水準が、成熟した先進国（北）においてより高い現状を踏まえ、デイリーは、「それを全世界に一般化した場合に環境の扶養力の範囲内におさまるという意味での持続可能性を北が達成すること」⁽³⁰⁾ が必要と指摘する。そこには、ミルが求めた人口抑制を南の国に求める以前に、北の国が現在の資源利用の水準を抑制する必要があるとの問題意識がある。

ミルの定常状態の経済思想は、デイリーらによって再評価され、現代の地球環境問題も踏まえ、持続可能な発展のための経済学として再構築された。そこでは、自然生態系の生物的物理的特性が、経済の物的成長に対して制約条件になることが強調されるとともに、公平な所得分配という理念も継承されている。

4 ミルの自然観の継承

(1) 定常状態の再評価と自然景観の価値

デイリーらによる定常状態の再評価は、ミルの自然観に立ち返るとき、ミルが自然の美やそれが人間に対して有する精神的・文化的価値を重視していたこと、また、その保全のために自然の美が失われる前に定常状態を選択すべきことを求めたことが、必ずしも継承されていない。デイリーは、経済に対する環境の制約と分配の公平について、ミルを継承し、より客観的な理論を示したと

いえるが、それは自然生態系の生物的・物理的評価に基づくものであり、自然の美の精神的・文化的価値は取り上げていないのである。

ド・スタイガーによれば、デイリーの定常状態の経済が理想とするのは「第1に人間と環境の間の調和であり、第2に経済的な平等である」⁽³¹⁾と評価し、その根本にある思想は、「環境と天然資源が人間の欲求の充足にとって本質的なものであることを認識」⁽³²⁾していることであるとしている。しかし、「資源利用の限度は、最低限の物質的な満足とともに精神的発展の基礎となる余暇時間をも生み出す資源量によって決定される」⁽³³⁾と述べており、「精神的発展」は余暇時間になされるもので、資源は余暇時間を生み出すものとの位置づけにとどまっている。すなわち、自然の美が人間に対して精神的・文化的価値を有し、したがって、美しい自然を資源として積極的に保全するという観点が明示的には示されないのである。

デイリーは、成長に対する倫理社会的な限界の一つとして、成長が道德基準をむしろむような影響をもたらすことをあげ、経済的福祉とは別の総福祉の構成要素を考慮しなければならないという。そして、「別の構成要素とは、成長が限界を圧迫したときに、成長が妨げ、むしろむことになる福祉の他の構成要素だ」⁽³⁴⁾と指摘するが、自然の美やその精神的・文化的価値への言及はみられない。

ミルの定常状態の経済思想の大きな意義は、経済的進歩よりも人間的進歩を重視することであり、人間的進歩のために不可欠な自然景観の保全を経済的進歩に優先するものと位置づけたことである。その現代的な再評価と継承が必要である。

(2) 土地保有改革による継承

ミルの自然美の保全の思想は、ミルの土地保有改革に関する実践的な取組を通じて継承されていく。定常状態の議論が100年以上にわたって顧みられなかった一方で、自然美の保全については、定常状態とは切り離されることによって、継承されたともいえる。

土地保有改革協会の綱領は、「1 ミルの自然観 (2) 人類の相続財産」において紹介したとおりであ

るが、綱領第10条に掲げられた「(保存の目的で) 所有する権限を国家に獲得する」との方針は、1895年に発足したナショナル・トラストに継承されていく⁽³⁵⁾。ただ、ナショナル・トラストは、「国家の」あるいは「国立の」というのではなく「国民の」という意味で、「純然たる民間の非政府団体である」ことが強調され、「国民のために国民自身の手で価値ある美しい自然と歴史的建造物を寄贈、遺贈、買取などして入手し、保護管理し、公開する」⁽³⁶⁾ものとされる。

その意味では、綱領第10条を具体化するものとして、国立公園を位置づけることができる。綱領が制定され、協会が発足したのは1871年であるが、その翌年の1872年にはアメリカで世界最初となるイエローストーン国立公園が土地を国が所有する形で、いわゆる営造物公園として設立された。イエローストーン国立公園誕生の意味は、「[すべての国民のための]」という民主主義的なアイディアとしてその制度が発足した点」⁽³⁷⁾にあるとされるが、ミルの自然観に通じるものがある。

また、ミルの経済学を継承し、発展させたアルフレッド・マーシャルの政策論の中に、ミルの経済思想の反映が読みとれる。マーシャルは、都市労働者の住環境の悪化に対して、空気と陽光とオープンスペースが必要だとして、空気浄化税を提言し、また、開発に対してゾーニングや建築規制を提言した⁽³⁸⁾。マーシャルの自然の価値に関する認識はミルの考え方を踏まえるものと思われるが、都市部における具体的な政策手法として、国による土地所有ではなく、土地の私有を前提として規制を行うゾーニングを提案したことは、日本の国立公園がゾーニングによる、いわゆる地域制公園であることとの関連で興味深い。

このように、自然景観の美が人間にもたらす精神的・文化的価値の側面については、土地保有改革などの動きを通じて、自然保護の思想として部分的に継承されてきたと考えられるが、デイリーらによる定常状態の経済思想の再構築の動きの中の一体的な継承は、未だなされていない。

おわりに

ミルの定常状態は、環境的にも経済的にも持続可能で人間の進歩を目指す理想的な社会をビジョンとして示すものである。その根底には、自然景観の美が人間にもたらす精神的・文化的価値を重視し、自然を人類の相続財産と捉えるミルの自然観がある。

ミルの定常状態の経済思想は、100年以上を経過した今日、地球規模での環境問題の深刻化に伴って再評価され、デイリーらによって、自然生態系の生物的・物理的な制約に基づく経済学と生態学の統合という形で継承が図られている。デイリーらの主張は経済学の大勢からみると未だ少数派にとどまっているが、持続可能な発展の概念とともに、理解が広がることを期待したい。

しかし、ミルの自然観に立ち返るとき、自然景観の美が人間にもたらす精神的・文化的価値の今日的な再評価及び定常状態の経済思想の再構築の動きの中での一體的な継承は未だなされていない。自然景観の保全は人間の進歩のために不可欠なものであり、自然景観を守るためには物的成長による経済的進歩を敢えて止めて、定常状態に入ることを選択する、このミルの主張の要の論点が、定常状態の再評価に関する従来の議論の中で、明示的には示されていない。

この問いに答えるためには、われわれは今一度ミルの思考の出発点に戻って、「一体、社会は、その産業的進歩によって、どのような究極点に向かっていくか」を問い直す必要がある。また、自然景観が有する精神的価値は、自然体験を通じて養われる面があり、足元での実践活動が欠かせないともいえる。

今後、ミルの定常状態の経済思想の現代的な含意を再評価するとともに、環境面から持続可能な経済社会の実現に向けて、環境政策は経済活動の規模や目的にまで射程を広げ、経済政策とも統合した形で構想され、具体化される必要がある。その際、自然生態系の科学的評価に加えて、自然景観の美が人間にもたらす精神的・文化的価値を評

価し、経済的進歩よりも人間の進歩を求めたミルの思想に立ち返ることが必要である。

《注》

- (1) 原文の“stationary state”は、これまで「停止状態」と訳される例が多かったが、本稿では、これが自然必然的に到達する悲観的な状態を指す場合には「停止状態」とし、あるべき社会状態として選択する状態を指す場合には「定常状態」と表記する。
- (2) 大森正之「ケンブリッジ環境経済思想の形成と展開」金子・尾崎編著『環境の思想と倫理——環境の哲学、思想、歴史、運動、政策』人間の科学社、2005年、104頁。
- (3) Mill, J.S., *AUTOBIOGRAPHY OF JOHN STUART MILL*, 1873. (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波書店、1955年、133頁)。
- (4) 同上、132頁。
- (5) 同上、124頁。
- (6) 同上、125頁。
- (7) 同上、133頁。
- (8) 同上、136頁。
- (9) Mill, J.S., *PRINCIPLES OF POLITICAL ECONOMY WITH SOME OF THEIR APPLICATION TO SOCIAL PHILOSOPHY*, 1848. (末永茂喜訳『経済学原理』岩波書店、1960年、第2分冊74頁)。
- (10) 同上、第5分冊17頁。
- (11) 四野宮三郎『J.S. ミル思想の展開Ⅱ 土地倫理と土地改革』御茶の水書房、1998年、130-131頁。
- (12) 同上、132頁。
- (13) 末永、前掲訳書、第4分冊101頁。
- (14) 同上、第4分冊103-104頁。
- (15) 同上、第4分冊104頁。
- (16) 同上、第4分冊105頁。
- (17) 同上、第4分冊105-106頁。
- (18) 同上、第4分冊107頁。
- (19) 原文の引用については、邦訳にしたがって「停止状態」と表記する。なお、文脈によって、定常状態を意味する場合はその旨()書きで注記する。
- (20) 末永、前掲訳書、第4分冊108頁。
- (21) 同上、第4分冊108-109頁。
- (22) 同上、第4分冊109頁。
- (23) 同上、第4分冊109頁。
- (24) Boulding, K.E., *Beyond Economics: Essays on society, Religion, and Ethics*, University of Michigan Press, Ann Arbor, Michigan, 1968. (公文俊平訳『経済学を超えて(改訳版)』学習研究社、1975年、440頁)。
- (25) Daly, H.E., *BEYOND GROWTH The Eco-*

- nomics of Sustainable Development*, Beacon Press, Boston, Massachusetts, 1996. (新田・藏本・大森共訳『持続可能な発展の経済学』みすず書房, 2005年, 4頁)。
- (26) 同上, 1頁。
- (27) 同上, 37頁。
- (28) 同上, 113頁。
- (29) The World Commission on Environment and Development, *Our Common Future*, Oxford University Press, Oxford, England, 1987. (環境と開発に関する世界委員会, 大来佐武郎監修『地球の未来を守るために』福武書店, 1987年, 28頁)。
- (30) 新田・藏本・大森, 前掲訳書, 4頁。
- (31) De Steiger, J. E., *The Age of Environmentalism*, WCB McGraw-Hill, 1997. (新田功他訳『環境保護主義の時代——アメリカにおける環境思想の系譜』多賀出版, 2001年, 165頁)。
- (32) 同上, 165頁。
- (33) 同上, 165頁。
- (34) 新田・藏本・大森, 前掲訳書, 53頁。
- (35) 大森, 108頁。
- (36) 木原啓吉『ナショナル・トラスト新版』三省堂, 1998年, 36頁。
- (37) 親泊素子「イエローストーン国立公園の成立について」『情報と社会』No. 18, 江戸川大学, 2008年, 51頁。
- (38) 大森, 119-120頁。

参考文献

- 大森正之「J. S. ミルにおける自然保護の理論と実践——wealth, natural riches, commons 概念を手がかりとして」『政経論叢』70巻5・6号, 明治大学政治経済研究所, 2002年。
- 大森正之「マーシャルにおける都市アメニティ保全の理論と政策」『政経論叢』71巻5・6号, 明治大

- 学政治経済研究所, 2003年。
- 親泊素子「イエローストーン国立公園の成立について」『情報と社会』No. 18, 江戸川大学, 2008年。
- 金子・尾崎編著『環境の思想と倫理——環境の哲学, 思想, 歴史, 運動, 政策』人間の科学社, 2005年。
- 木原啓吉『ナショナル・トラスト新版』三省堂, 1998年。
- 四野宮三郎『J. S. ミル思想の展開Ⅱ 土地倫理と土地改革』御茶の水書房, 1998年。
- 杉原四郎『J. S. ミルと現代』岩波書店, 1980年。
- Boulding, K. E., *Beyond Economics: Essays on society, Religion, and Ethics*, University of Michigan Press, Ann Arbor, Michigan, 1968. (公文俊平訳『経済学を超えて (改訳版)』学習研究社, 1975年)。
- Daly, H. E., *BEYOND GROWTH The Economics of Sustainable Development*, Beacon Press, Boston, Massachusetts, 1996. (新田・藏本・大森共訳『持続可能な発展の経済学』みすず書房, 2005年)。
- De Steiger, J. E., *The Age of Environmentalism*, WCB McGraw-Hill, 1997. (新田功他訳『環境保護主義の時代——アメリカにおける環境思想の系譜』多賀出版, 2001年)。
- Mill, J. S., *PRINCIPLES OF POLITICAL ECONOMY WITH SOME OF THEIR APPLICATION TO SOCIAL PHILOSOPHY*, 1848. (末永茂喜訳『経済学原理』岩波書店, 1960年)。
- Mill, J. S., *AUTOBIOGRAPHY OF JOHN STUART MILL*, 1873. (朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波書店, 1955年)。
- The World Commission on Environment and Development, *Our Common Future*, Oxford University Press, Oxford, England, 1987. (環境と開発に関する世界委員会, 大来佐武郎監修『地球の未来を守るために』福武書店, 1987年)。